ハート・クレイン『橋』の「パウハタンの娘」における死者のこだま、あるいは声の変容

高　橋　　諒

はじめに

ハート・クレインは1899年にオハイオ州に生まれ、1932年にメキシコ湾にて入水自殺をした、アメリカの詩人である。シュロスによれば、クレインは「生前、彼の世代においては、最も前衛的な詩人のうちの一人であった」(132)。それゆえ、彼の作品は当時も高く評価されていた一方で、彼の人生は、最終的に彼を自殺に追い込んでしまうほど複雑なものであった。クレインはアルコール中毒に苦しめられていたが、それは彼の両親の問題が原因であったらしい。シュロスによれば、「彼は両親の夫婦間の問題の犠牲者であった。というのも、両親の口論に不安げにも参加することによって、彼の性格は捻じ曲げられ、引き裂かれた」(136) のであった。こうした伝記的事実が示唆するのは、彼の作品を、葛藤に満ちかつ苦痛を強いられた彼の人生の反映であるとみなすことが可能であるということだ。

1930年に出版されたクレインの代表作である『橋』は八つの章から構成されており、第二章「パウハタンの娘」は五つのセクション、第五章「三つの歌」は三つのセクションからなる。そしてこのテクストは、極度に複雑で難解である。ジャイルズによれば、この詩は「表面を単に引っ掻いただけだというイライラした感覚とともに読者が置き去りにされる、それほど並外れて複雑」(222) であるということになる。その複雑さゆえに、これまで『橋』をめぐって様々な解釈がなされてきた。この難解で濃密なテクストを再解釈するために、バーソフの『橋』に関する見解が役立つかもしれない。彼によれば、このテクストの主題は「アメリカの神話」や

「アメリカという国家の再起」(84) であるという。実際に第二章「パウハタンの娘」では、アメリカの神話的起源という脈絡で決定的に重要な役割を果たしているポカホンタスについての言及が繰り返し出てくる。もっと厳密に言えば、彼女はアメリカの過去と現在とを結ぶ「橋」として機能している。ここで重要な点は、「未開地の人々」の音あるいは声として様々に転調をしていくポカホンタスの声の特徴である。この論文では、「パウハタンの娘」の五つのセクション全体を通して、意義深く反復され変転していく様々な音や声に注目し、それらの音声がいかなる形でアメリカ建国史という神話的な物語に関与していくのか、その点について議論したい。

異質なものを結ぶ橋

アメリカ建国史という神話的物語の中に登場するポカホンタスについての語りは、ラブロマンスに落ち着くことが多く、それは、例えばジョン・スミスなどといったイギリス人「開拓者」側の視点から語られることが多い。ポカホンタスは、西洋人による歴史に初めて名を残したネイティヴ・アメリカンであることは確かである。その一方で、彼女自身の声は、ほとんど常に、例外的な場合を除いては、テクストにおいて周縁化されている。

ハート・クレインの『橋』の第二章「パウハタンの娘」において、様々な音や声が前景化されており、それが最も重要な特徴である。例えば、第一セクション「港の夜明け」では、夜明け前に様々な機械音が鳴り響いており、そのせいで語り手は眠れないというシーンで始まる。そしてその語り手は、雑音に霊感を受けながら詩的な表現でアメリカ建国の歴史に思いをはせる。それゆえ、このテクストはアメリカの神話的な歴史を音の連想として表現しているとみなすことができる。「港の夜明け」の七行目では機械音が“throbbing”(11) という人間の鼓動として表現されている。このように、語り手は機械音を人間の鼓動になぞらえて語り始めるのだ。このように、クレインは機械や人の音に焦点を当てながら「パウハタンの娘」を書き始めている。別の言い方をすれば、彼は物質的な物の音や人間の声を、アメリカの文明化をめぐる神秘的な物語へと詩的に昇華させている、と解釈できる。

それゆえ、本質的には異なる機械と人間とを結びつけるような詩的表現に注意を向ける必要がある。これは『橋』という示唆的なタイトルと直接的に関連する論点となる。実際に、東が指摘するように、ポカホンタスはネイティヴ・アメリカンとイギリス植民者とをつなぐ橋として機能した。『橋』というタイトルは「新旧両大陸の懸け橋となったポカホンタスが典型となるように、異質を連結し、異次元世界への移行を象徴する」（349）のである。「パウハタンの娘」において、直接的にポカホンタス自身が描写される。彼女が登場する第四セクション「踊り」では、どのように彼女が白人植民者と出会ったのか、その起源が描かれている。

> The swift red flesh, a winter king—
> Who squired the glacier woman down the sky?
> She ran the neighing canyons all the spring;
> She spouted arms; she rose with maize—to die.
>
> （“The Dance” 22、強調引用者）

“She” という代名詞はポカホンタスを指している。ここでは、彼女はトウモロコシとともに目覚め、死んだとある。では、トウモロコシとともに目覚めたとはどういうことであろうか。ポカホンタスが暮らしていた地は、西洋人に「発見」されるまで歴史に記述はない。もちろん、この「発見」というレトリックは西洋人側の視点を示す。イギリス人がこの地にやってきた時、彼女の存在は認識され、イギリス人の言語で表現されることになる。つまり、イギリス人に提供したトウモロコシを通じてポカホンタスが彼らと交流することによって、彼女はその名を歴史に残したのである。これがポカホンタスにとっての「目覚め」という風に表現されている。しかし、このように彼女が新旧両大陸の架け橋となった起源は描かれているものの、彼女の声は描かれていない。

確かに、ポカホンタスがアメリカの創成という神話的物語にあって、その起源として表象されていることは疑いようがない。それと同時に、クレインはほとんど歴史に名前が記載されることのなかった多くのネイティヴ・アメリカンたちにも注意を向けている。そして彼/彼女らも新旧両大

陸を結ぶ、ある種の橋として機能していたことが描かれている。ここで注目したいのは、「踊り」と題されたセクションにおける、ネイティヴ・アメリカンが身につけていた頭飾りの描写である。

> A cyclone threshes in the turbine crest,
> Swooping in eagle feathers down your back;
> Know, Maquokeeta, greeting; know death's best;
> —Fall, Sachem, strictly as the tamarack!
>
> ("The Dance" 24、強調引用者)

インディアンの頭飾りは新大陸側の文化のシンボルである。ここで森田が指摘しているのは、クレインが頭飾りを形容するのに「タービン・エンジン」という文明化の象徴、つまり旧大陸側の文化のシンボルとも言える機械を用いている、ということである。

> インディアンの頭飾りを形容するのにタービン・エンジンを持ってくるのは大袈裟だが、それを承知で用いたのだとクレインは主張する。その意図は、両者のイメージをだぶらせる事に依ってふたつの文化の融合をはかることにある。機械文明のシンボルも、インディアン文化のシンボルとひとつに重なってこそアメリカ合衆国が出来上がる。(145)

このように、クレインはポカホンタスだけでなく、彼女のサイドストーリーにまで注目している。それらの声は、記されることのないネイティヴ・アメリカンたちの日常の隠された物語を示唆するが、彼/彼女らの日常生活に西洋文明が溶け込むことで新大陸はアメリカという国になっていく。言い換えれば、ポカホンタスがイギリスとアメリカ大陸との架け橋であるとすれば、声なきインディアンたちも両大陸の文化的融合の橋渡しとして機能していると言える。

変転する声たち

歴史には人物の声が記されることがあるが、それは歴史を記述する側、新旧両大陸の交流という脈絡で言えば西洋側の記述した声ということになる。しかし、「パウハタンの娘」では様々な人物の声が描写されており、それらの声は歴史上に名前を残した人物に限られない。第三セクション「河」では、文明化を象徴する音とともに、線路工夫たちの声が描かれている。そのような声が、どのようにアメリカ建国史と関わっているのか、について考察したい。

a Ediford—and whistling down the tracks
a headlight rushing with the sound—can you
imagine—while an EXpress makes time like
SCIENCE—COMMERCE and the HOLYGHOST
RADIO ROADS IN EVERY HOME WE HAVE THE NORTHPOLE
WALLSTREET AND VIRGINBIRTH WITHOUT STONES OR
WIRES OR EVEN RUNning brooks connecting ears
and no more sermons windows flashing roar
breathtaking—as you like it…eh?（“The River” 16、強調引用者）

このスタンザでは、汽車やラジオといった機械文明を象徴するものが登場している。この汽車の行き先は西であるが、この箇所は西部開拓時代後を舞台にしており、すでにアメリカの土地になった西へ向かっていることになる。アメリカの一部になった「西」では“rushing with the sound”とあるように、音とともに汽車が走行している。これが示唆するのは、開拓可能な西の土地は、もうすでにアメリカという国の一部になっており、東から西へアメリカ人が移動しているということである。居住域を西へと広げていくその様子を、汽車の走る音から読み取ることができる。

次の場面は作業をする線路工夫たちが歌を歌っている場面である。

Time’s rendings, time’s blendings they construe

As final reckonings of fire and snow;
Strange bird-wit, like the elemental gist
Of unwalled winds they offer, singing low
My Old Kentucky Home and Casey Janes,
Some Sunny Day. I heard a road-gang chanting so.
And afterwards, who had a colt's eyes—one said,
"Jesus! Oh I remember watermelon days!" And sped
High in a cloud of merriment, recalled
"—And when my Aunt Sally Simpson smiled," he drawled—
"It was almost Louisiana, long ago." ("The River" 17、強調引用者)

これまでは機械の雑音がテクストの前景を占めていたが、この箇所では西へと文明化が進んで行く過程で他者に聞かせる歌へと音声が変化している。この他者を想定している声が、文明の発展とともに西へと移動している。

しかし興味深いのは、「河」では、こうした声の中で死者の声がこだましているという点だ。ここでいう死者とは、他でもないポカホンタスのことであるが、語り手は死亡している彼女の声を聴いている。

And past the circuit of the lamp's thin flame
(O Nights that brought me to her body bare!)
Have dreamed beyond the print that bound her name.
Trains sounding the long blizzards out—I heard
Wail into distances I knew were hers.
Papooses crying on the wind's long mane
Screamed redskin dynasties that fled the brain,
—Dead echoes! But I knew her body there,
Time like a serpent down her shoulder, dark,
And space, an eaglet's wing, laid on her hair.
("The River" 18-19、強調引用者)

本来、詩というのは感情を表現するものである。上の引用の二行目でも“O”という感嘆を表す語で始まっており、いかにも詩的である。しかし、この行は括弧でくくられており、他の感情と区別されている。言い換えれば、他の感情とは違い、語り手が他者に伝える意図がない、そのような感情の高ぶりを表現しているのかもしれない。ポカホンタスを前にした語り手が、このように内的に高揚しているのはどうしてであろうか。

興味深いのは、二つ目の下線部の“Dead echoes! But I knew her body there”という箇所である。ポカホンタスの声がこだまし、遺体がそこにある、ということであるが、史実では彼女はイギリスで客死し、彼女の遺骸はその地のセント・ジョージ教会に埋葬された。『橋』の主題となっているアメリカの神話的シーンの一つがこの場面となっている。これが意味するのは、アメリカの創成神話の起源としてのポカホンタスは、たとえ異国に埋葬されていても、その声は移動せずにアメリカにとどまり続けているということである。

このように、「河」では文明化を象徴する機械の音は西へと移動しているが、原住民であったポカホンタスの声は移動していない。それは、セクションのタイトルにもなっている「河」という語とも関係があるように思える。たとえ河の水は流れていっても、水源は動かぬままである、そのような含意がこの「河」という語に読み取れるのではないか。ポカホンタスを河の水源と考えると、その地から発展していった「河」としてのアメリカというような象徴的な解釈が、このセクションに関して可能である。そのようにしてクレインは、「河」という形象を使用しながら、アメリカの国土が拡大していった建国の歴史を、声の移動として表現しようとしたのである。

アーヴィングの声

さて、「パウハタンの娘」には「ヴァン・ウィンクル」と題された、すでに出版物となっている短編小説のタイトルを借用したセクションがある。この短編小説はワシントン・アーヴィングが執筆したもので、主人公リップ・ヴァン・ウィンクルが森にさまよい、眠ってしまうと二十年の時

が経っていた、という物語である。なぜ、クレインは「パウハタンの娘」の中に、この短編小説を引用したのだろうか。

> Times earlier, when you hurried off to school,
> —It is the same hour though a later day—
> You walked with Pizarro in a copybook,
> And Cortes rode up, reining tautly in—
> Firmly as coffee grips the taste,—and away!
>
> There was Priscilla's cheek close in the wind,
> And Captain Smith, all beard and certainty,
> And Rip Van Winkle bowing by the way,—
> "Is this Sleepy Hollow, friend—?" And he— ("Van Winkle" 13)

森田は、「ヴァン・ウィンクル」の二つ目と三つ目のスタンザは、アメリカ建国をめぐるものであると論じる。第二スタンザは「新大陸初期の侵略時代を語り」、第三スタンザは「建国時代から今日までを語っている」(82)のだという。「今日」というのは当然、『橋』が出版された1930年のことで、第一次大戦が終わった後の世界恐慌の頃である。この状況を踏まえて、森田は「ヴァン・ウィンクル」の登場人物に着目しながら、二十年が経過したという短編小説のプロットをアメリカの歴史に接続しようと試みている。

> ところで、アメリカの建国時代から今日までの歴史が、キャプテン・スミスからいきなりリップ・ヴァン・ウィンクルでまとめられてしまっていることに注目すべきであろう。それは、アメリカの現代史がそれほど現実離れしてしまっているように思えるということである。または思いもかけない結果となって、まるで寝過ごして目をさました時のように慌ててしまう。それが戦後20年代の実感でもあった。(83)

このセクションでは、ジョン・スミスという新大陸との交流の嚆矢となっ

た人物が登場し、いきなりヴァン・ウィンクルに物語が飛躍している。

クレインの意図はいかなるものであったのだろうか。急激な経済の繁栄、そして世界恐慌という歴史を考慮すれば、この経済的に落差の激しい状況を戦後わずか二十年で経験したアメリカを描写するのに「リップ・ヴァン・ウィンクル」という短編小説からの引用は有効であったのだろう。

それに加え、アメリカという国が、旧大陸の文明から逸脱しつつ、非常に短期間に成立したということも、ここで含意されているのかもしれない。森田によれば、クレインの詩的表現、たとえば、“The cinder pile at the end of the backyard”や“That flittered from under the ash heap day”(14)といった、燃えかすの堆積を示唆する箇所は歴史の堆積を表象しており、それらは旧大陸の経験してきた歴史を示していることになる。つまり、旧大陸における文明の発展という漸進的な過程を、アメリカはスキップしたのだと考えることができるのではないだろうか。その意味でも、アーヴィングの短編からの引用の意味を理解することができる。

そして、このセクションを締めくくるのは語り手によるリップに対する語りかけである。

> Macadam, gun-grey as the tunny's belt,
> Leaps from Far Rockaway to Golden Gate….
> Keep hold of that nickel for car-change, Rip, —
> Have you got your “*Times*” —?
> And hurry along, Van Winkle—it's getting late!（“Van Winkle” 15）

語り手の「『タイムズ』は持ったのかい？」というセリフに注目したい。『タイムズ』は言うまでもなく新聞のことである。この語り手が新聞を持ったのかと確認するというようなことから、クレインの詩的言語が日常生活のレベルにまで及んでいることがわかる。言い換えれば、「ヴァン・ウィンクル」というセクションは、壮大なアメリカの建国史の初期から戦後まで一気に話が飛躍しながら、最終的には特定の人物に語りかけるというふうに終わっている。つまり、神話的な時空と現在的な日常が結びつき、一個の有機的な統一としての詩的言語がここに現出している。

旧大陸からアメリカへ、そこから別の場所へつなぐ声＝橋

これを踏まえて、最終セクション「インディアナ」ではどのような声が描写されているのか検討していきたい。このセクションは「パウハタンの娘」の中でおそらく最も歴史が経過しており、家庭的でプライヴェートなやりとりに焦点が当てられている。

Come back to Indiana—not too late!
(Or will you be a ranger to the end?)
Good-bye…Good-bye…oh, I shall always wait
You, Larry, traveller—
stranger,
son,
—my friend— (“Indiana” 29)

これは「インディアナ」の最後のスタンザである。“Come back to Indiana”というセリフは、息子のラリーへ向けられた母親のセリフである。森田によれば、家を出て行くこの人物にとって「どこをさまようとも、まずは帰るところはできた」(177) ことになる。つまり、この場所はすでにアメリカの土地として定着しているということが読み取れる。このセリフから、アメリカという一つの国が完成したということができる。

第一セクション「港の夜明け」前半部ではsoundsやnoises、あるいは機械音という雑音が響いている。しかし、後半に聞こえる音はsongという他者に聞かせる音へと変化していく。それが最終セクションの「インディアナ」では「帰っておいで」という息子へ向けられた言葉となって「パウハタンの娘」は終わっている。

このように、アメリカ建国の歴史はポカホンタスが登場して、彼女が新旧両大陸の懸け橋となることで始まる。言い換えれば、それはイギリスと新大陸をつなぐ橋であり、新大陸はいわばイギリスから見た目的地となっていた。しかし、今見てきたように、この「パウハタンの娘」では、ポカホンタスが新旧両大陸の懸け橋になっているにとどまらず、名前が記載さ

れることのないネイティヴ・アメリカンたちも、両大陸の文化的融合の橋渡しとして機能していたことが描かれている。さらに、このテキストは壮大な物語から始まり、一般家庭のレベルまで話の焦点が変化していく。その家庭から出発する若者には帰るところができた。そして、新大陸ではなくアメリカという国になった地が、今度は他の場所へと向かう出発地点になっている。このことを暗示する詩の最終箇所は、この場所がアメリカと別地点をつなぐ、新たな橋になっていることを告げている。このように、ハート・クレインの『橋』は、様々なレヴェルの声＝音を共鳴、反響、変奏させ、それらを複数の場所をつなぐ「橋」として表象しながら、アメリカ創成という神話的物語を一個の精巧な詩的言語に昇華している。

＊この論考は、2021 年 2 月 28 日にオンラインで実施されたワークショップ「“Powhatan’s Daughter” を読む」において口頭発表された議論を基本としている。その際に貴重なコメントをいただいた下河辺美知子先生と来馬哲平先生に心から謝意を表明したい。

引用文献

Berthoff, Warner. *Hart Crane, A Re-Introduction*. U of Minnesota P, 1989.

Crane, Hart. *The Bridge*.1930. Liveright, 1992.

Giles, Paul. *Hart Crane: The Context of ‘The Bridge’*. Cambridge UP, 1986.

Shloss, Carol. *The Lives of Hart Crane: Revision of Biography*. Vol. 3. U of Hawaii P, 1980.

東雄一郎「ハート・クレイン論」『ハート・クレイン詩集』南雲堂, 1994 年.

森田勝治『ハート・クレイン「橋」研究』近代文芸社, 1999 年.